



このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

## ワーキングメモリと特別な支援

一人ひとりの学習のニーズに応える

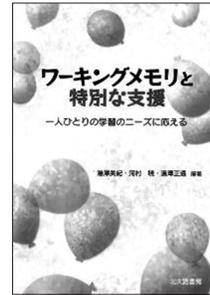
湯澤美紀

「怠けている」「すぐに飽きる」「人の話を聞いていない」ように見える子どもが、実はワーキングメモリの小ささから学習困難を抱えていることは、これまで教育の場ではさほど理解されていませんでした。しかし、心理学の領域で研究されてきた「ワーキングメモリ」の理論は、そうした子どもの理解と具体的な支援の方法を提案するうえで、有効なフレームとなります。本書は、ワーキングメモリをキーワードに、一人ひとりの学習のニーズに応じていきます。

本書では、冒頭にワーキングメ

モリの理論を概説した後、「ワーキングメモリを考慮したユニバーサルデザイン」を提案し、これまで蓄積されてきている有効な支援方略をワーキングメモリの観点から整理しました。そして、著者の一人である河村が個別指導で培った支援技術を国語（読み・語彙・読解・書き）、算数（計算・文章題）の領域ごとに紹介するとともに、観察研究に基づいた教師の学級経営に関する専門技術を考察しました。

子どもを中心とした理論と実践の対話が、本書をきっかけにさらに広がることを期待しています。



編著 湯澤美紀・河村暁・湯澤正通

発行 北大路書房

A5判 / 136頁

定価 本体 1,900円＋税

発行年月 2013年10月

ゆざわ みき

ノートルダム清心女子大学児童学科准教授。専門は発達心理学。著書はほかに『幼児の音韻的短期記憶に関する研究』（風間書房）、『ワーキングメモリと発達障害』『ワーキングメモリと学習指導』（いずれも共訳、北大路書房）、『日本語母語幼児による英語音声の知覚・発声と学習』（共著、風間書房）、『子どもの育ちを支える絵本』（分担執筆、岩波書店）など。

## 子どもの不安と抑うつに対する認知行動療法

理論と実践

石川信一

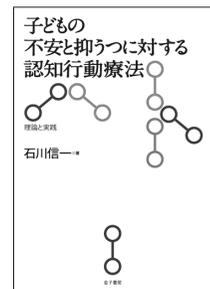
①日本での研究に基づく認知行動療法の紹介、②臨床心理学の実践と理論の在り方の提示—本書執筆のねらいはこの二点です。

本書は全4章で構成されています。最後の4章では日本における学校や相談場面での実践研究を報告しています。そして、実践研究で検証された支援の中身については、技法ごとに3章で紹介しています。1,2章では、子どもの不安と抑うつ、認知行動療法の理論的な面について説明しています。これらが本書の幹となり、3章での技法がレシピ集の羅列に

ならないよう心がけました。一方、実際に子どもに見せる資料を多く掲載することで、支援の実態が見えるよう工夫しました。

以上より、本書では借り物ではない科学者・実践家モデルとしての認知行動療法の一例を示すことをめざしています。このねらいがどの程度達成されているかについては、本書を手にとってご判断いただければ幸いです。

最後に、本書は子どもたち、保護者の方々、学校の先生方の多大なご協力なしには存在しえません。心より感謝申し上げます。



著 石川信一

発行 金子書房

A5判 / 252頁

定価 本体 3,000円＋税

発行年月 2013年8月

いしかわ しんいち

同志社大学心理学部准教授。専門は臨床児童心理学。著書はほかに『学校のできる認知行動療法』（共著、日本評論社）、『認知行動療法という革命』（共訳、日本評論社）、『不安に悩まないためのワークブック：認知行動療法による解決法』（共訳、金剛出版）、『子どもと青少年のためのマインドフルネス&アクセプタンス』（監訳、明石書店）など。



著 矢守克也  
 発行 ミネルヴァ書房  
 A5判 / 234頁  
 定価 本体 3,500円＋税  
 発行年月 2013年9月

やもり かつや  
 京都大学防災研究所巨大災害研究センター教授。専門は社会心理学、防災心理学。著書はほかに『アクションリサーチ』（新曜社）、『防災人間科学』（東京大学出版会）、『生活防災のすすめ』（ナカニシヤ出版）、『災害・危機と人間』（編著、新曜社）、『復興と支援の災害心理学』（編著、福村出版）、『夢見る防災教育』（共著、晃洋書房）など。

## 巨大災害の リスク・コミュニケーション

災害情報の新しいかたち

矢守克也

「リスクのコミュニケーション／コミュニケーションのリスク」——本書のタイトルは一種の掛けことばになっていて、その点こそが本書で発信したかったメッセージである。

つまり、今、日本社会は、南海トラフの巨大地震・津波、首都直下型地震など、これまでにない規模の災害リスクと背中合わせの状況にあると言われる。たしかに、東日本大震災のように、リスクの「想定」が適切にコミュニケーションされていないために大きな被害に見舞われることはある。しかし他方で「想定」がコミュニケーションされること自

体がリスクとして機能する危険もある。想定に縛られて対策が硬直化する、巨大な想定を前に逆にあきらめてしまうといった副作用である。本書に何度も登場する「パラドックス」という言葉には、この点に対する警戒の念を込めている。

こうして、書名にはまず、災害リスクに関するコミュニケーションという通常の意味がある。しかし同時に、コミュニケーションに付随する大きなリスクという意味も重ね合わされている。この点を踏まえて読んでいただけると、著者としてはとてもうれしい。



編著 板倉昭二・北崎充晃  
 発行 ミネルヴァ書房  
 A5判 / 204頁  
 定価 本体 3,200円＋税  
 発行年月 2013年9月

きたざき みちてる  
 豊橋技術科学大学大学院工学研究科准教授。専門は知覚心理学、バーチャルリアリティ。著書はほかに『認知心理学』（共著、有斐閣）、『だまされる脳』（分担執筆、講談社）、『イラストレクチャー 認知神経科学』（分担執筆、オーム社）、『知覚心理学』（分担執筆、ミネルヴァ書房）、『認知心理学演習』（分担執筆、オーム社）など。

## ロボットを通して探る 子どもの心

ディベロップメンタル・サイバネティクスの挑戦

北崎充晃

ディベロップメンタル・サイバネティクスは、子どもと人以外のエージェント（ロボット、メディア等々）のインタラクションを研究し、心の発達を解明する研究領域です。「心の理論」は人が心をどう理解するのかを研究対象としますが、加えて「身体の理論」と「コミュニケーションの理論」の三者の理解と発達、そしてその統合が発達の理解に必要なだと私たちは考えています。そこで、そうした観点の研究や若い著者らによる最新の研究成果をコンパクトにまとめました。本書は、発達や教育

の専門家には、「心の理論」研究の最前線やロボットと人の社会的関係に関する最新知見を得るのに最適です。また、知覚や神経生理の専門家には、今の発達認知科学を知る入門書としても機能します。

メディアやロボットは日常生活に溢れています。このような環境で育つ子どもたちの未来を少しでも良くするために、子どもの発達を知ること、エージェントの影響を明らかにすること、適切なエージェントの設計を提案することが必要です。本書がその一助になればと思います。